




審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1381 号	氏名	鶴田 耕三
審査担当者	主査	藤田 文彦	
	副主査	松野 純	
	副主査	黒松 亮子	
主論文題目：Symptoms Contributing to the Diagnosis of Small Bowel Tumors (小腸腫瘍の診断に寄与する症状)			

審査結果の要旨（意見）

当院全体での小腸腫瘍をまとめた大変貴重なデータであると思われる。疾患は、良性から悪性の多岐にわたっており、2013年9月から2020年7月までの症例を電子カルテからスクリーニングし169例を検討し、最終的に66例が抽出されている。これらから疾患別に、特徴や症状、診断契機となった検査などをまとめており、症状の有無での違いや無症状症例の特徴もまとめている。前期と後期を比較すると新規モダリティが出ているにもかかわらず、診断率の向上にはつながっておらず、CT検査での検出が圧倒的であった。小腸癌を病理学的に検討した結果では、ほとんど結腸癌と似た傾向になっていた。また、無症状症例も多いことから剖検例においてもある程度の比率の症例が含まれていることが文献的に示された。また、今回の結果はアジアでの報告と同じ傾向を示しており、今後の症例を集積することで傾向の変化を検討することもでき、有用な研究結果であると思われる。

論文要旨

小腸は評価する機会が限られており、小腸腫瘍の診断は技術的にも困難なことが多い。アジアでは小腸腫瘍は悪性リンパ腫、小腸癌、消化管間質腫瘍（GIST）の頻度が高いことが報告されている。

2013年1月から2020年7月に久留米大学病院で小腸腫瘍と診断された66症例を後ろ向きに研究し、その臨床的特徴を明らかにした。悪性リンパ腫と小腸癌が最も多く（22.7%）、GIST（21.2%）、転移性小腸腫瘍（18.2%）がそれに続いた。小腸腫瘍診断の契機となった検査は、CT検査、PET検査、MRI検査、超音波検査および内視鏡検査であり、CT検査の頻度が最も高かった（68.2%）。小腸腫瘍診断時の症状は腹痛（44.5%）、無症状（28.8%）、血球減少（12.1%）、貧血（10.6%）であり、偶然発見されるものも多かった。また、GISTおよび良性腫瘍は他の悪性腫瘍（小腸癌、悪性リンパ腫、転移性小腸腫瘍）よりも無症状であることが多かった。

小腸腫瘍の中でも特に小腸癌、悪性リンパ腫、転移性小腸腫瘍では腹痛が主症状であった。また、アジアで有病率の高いGISTでは、症状が少なかった。これらの特徴を理解することで、小腸腫瘍の臨床に役立てることができると考えられる。